



Title	Le Théâtre italienにおけるColombine役の発展
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 31, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Le Théâtre italien における Colombine 役の発展

赤 木 富 美 子

Le Développement du rôle de Colombine dans le Théâtre italien

Fumiko AKAGI

Le Théâtre italien, installé en France depuis 1660 était fort apprécié par les Parisiens pendant cette période intéressante de la fin du siècle (1680—1697). Avec le temps, la préférence du public pour certains acteurs orienta leurs rôles quelquefois au delà de la tradition de la Comedia dell'arte. En cela, on peut voir le goût des Français de cette époque qui transformait des types italiens. Nous nous sommes intéressés au cas de Colombine comme un type de femme préféré de l'époque. Le tableau statistique que nous en avons établi nous impose la constatation que Colombine avait obtenu un grand succès auprès du public français. Nous en avons ensuite cherché la raison, en analysant le caractère et la condition de Colombine dans les 55 pièces recueillies par Gherardi. Colombine jouait le plus souvent le rôle de soubrette. N'estimant rien d'autre que son esprit cynique et son talent de fourberie, elle affrontait toujours avec enjouement tous les obstacles qui contraignaient une femme de son temps. Nous avons trouvé ainsi un rapport étroit entre l'atmosphère de l'époque et l'incarnation de l'esprit de la fin du siècle chez une femme rusée mais vive et alerte qui annonçait déjà le 18^e siècle.

17世紀後半のパリで、人気のあった、イタリア劇団の人達が、首都に定着したのは、1660年からであったが、1680年、Comédie française の設立の年、彼らもまた、自分達の劇場を持つことができて、本格的に、フランス演劇界に登場することになる。⁽¹⁾はじめのうちは、俳優たちも、フランス語を話せず、たいした脚本もない即興劇で、身振り手振りのおもしろさがたよりだったが、この頃から、フランスの劇作家の協力をえて、⁽²⁾フランス語で、かかれた場面や劇を、演じるようになり、時代風俗の描写をとりいれて、喝采を博した。これが Scènes françaises および Comédies françaises といわれているものである。

当時、フランスの演劇界は、Molière の遺産のひとつである、現代風俗劇、Comédie des

Moeurs の方向へむかっていたが、その歩みはまだ憶病であった。それにひと押しを、あたえたのがイタリア劇団であるといわれている。⁽⁹⁾ また、Lintilhac は、彼らの、時代諷刺の活潑さを、つぎのようにのべている。「イタリア劇団の人たちは、つねに、現代の問題の先端を行っていた。そしてそれを、彼らの特権である奔放さであつかい、ついには、Madame de Maintenon まで、檜玉にあげようとして、それがフランスから追放される原因になった。」⁽⁴⁾

1680年、Hôtel de Bourgogne を本拠として、興行をゆるされてから、1697年、フランスを追放されるまで、この劇団は、鋭い現代性で、フランスの社会を、描きだし、フランス演劇の現代諷刺に、大きな影響を、あたえたのである。

イタリアの Comédia dell' arte の伝統、Lazzi や仮面、パントマイムなどの、演劇作法をまもりながらも、どんなに、この劇団が、フランスの現代風俗の観察に、敏感であったかを、A. Adam は証明している。⁽⁶⁾ 彼らは、イタリアの伝統演劇のおもしろ味を、フランス人の好みにあわせて、斬新な興味をひく術を、こころえていたのである。

このことはまた、イタリア劇団の演じた劇の構成や、人物の比重についても、いえることである。ほんらい、イタリア劇団では、人物は型によって演じられ、俳優は、マスクをつけて演じ、道化、悪役、老人といった風に、イメージが固定している。俳優の名前さえ、個人の名でなく、もち役の名でよばれたのが、その証拠である。Arlequin は、自分たちの劇団を、フランスの劇団と比較して、次のようにいっている。「Arlequin est toujours Arlequin, le Docteur est toujours Docteur, au lieu qu'un comédien françois est aujourd'hui César et demain Mascarille」⁽⁶⁾。だから1688年、それまで Arlequin であった Dominique Biancolelli が死ぬと、劇団は、1ヶ月間、閉鎖を余儀なくされ、さらに1年、Arlequin 役は、空席となった。Gherardi が何代目かの Arlequin をつぎ、1697年の国外追放まで、その名で舞台に立ったわけである。⁽⁷⁾

俳優によって、役がきまっており、そのうえ、きまったマスクをいつもつけているとなると、劇の構成も、人物の動きも、大体きまってしまうのが当然であり、フランス人の劇作家、たとえば Regnard などが、劇をつくる場合にも、ほぼ、イタリアの伝統に忠実になるのが、自然であった。

しかし、この固定した劇の形も、フランス人観客の好みに応えて、変化をうけることになる。その理由の第一は、先にあげたように、フランス語でかかれた場面が、どんどん増えて、現代風俗の批判を扱ったこと。第二は、俳優の中で、とくにフランス人に愛好された名優を中心とした、いわゆる pièce à vedette の出現が要求され、きまった構成が、くずれたことである。⁽⁸⁾ 例えば、単なる馬鹿役であった Arlequin が、ずるくて、皮肉屋の下僕に対する、フランス人の好みを反映して、その役柄を変化させ、どんどん重要な部分を占めてゆくなど、その典型的な例である。仮面という伝統の制約のもとで、フランス風下僕とは、異りながらも、イタリア劇団の

Arlequin が、フランス風に変貌してゆく過程は、またイタリア劇団が、伝統的な劇の構成や人物を、フランス的に変化させて、フランス人の人気をあつめてゆく過程でもあったわけである。

こうして、イタリア劇団の、きまった役の、成功や発展から、逆に、当時のフランス人観客の好みや、社会風俗をよみとるという方法が、可能だとおもわれる。

この稿では、座長, Dominique Biancolelli の娘であった Colombine をとりあげ、このことを研究してみたいとおもう。誰の目にも、活躍のあきらかな, Arlequin でなく, Colombine をとりあげた理由は、今まで余り注目されなかったということが第一であるが、しかし、同時に、われわれが今日まで追ってきた主題に関して、秘かな、発見の期待も、もっているからである。その一つ二つを、ここで説明しておきたい。

先に、「Marivaux 劇と Dancourt 劇における娘たち。」⁽⁹⁾の稿で、われわれは、両者を比較し、Marivaux 劇の興味の中心になっている令嬢や小間使など、娘役の活躍が、17世紀末の、風俗劇の筆頭にあげられる⁽¹⁰⁾ Dancourt の作品に、すでに見られたことを指摘した。17世紀末、こうした活潑な娘たちの生き方が、すでに、一つの社会現象として、見られたのではないかという推測も、同時につけ加えておいた。それについて、Dancourt 劇の周辺を、もっと広く調べる必要があったが、イタリア劇団の作品は、年代が同じであるうえ、両者のあいだには、外題のもほうや、対抗が、しばしば見られるほどで、⁽¹¹⁾ 恰度比較の対象に該当する。

また、次に、われわれは、Fontenelle 劇を調べ、⁽¹²⁾ 18世紀にかかれた、晩年の作には、美しく、やさしい娘たちが、主役を占めることから、Marivaux との関係を考え、娘役の重視は、イギリスの影響だとする説も、考慮にいれておいた。しかし、Marivaux が、18世紀に、再度来仏したイタリア劇団と関係があったことを考えると、17世紀末のイタリア劇団の娘役の調査も、当然、必要だと思われる。

ところで、Colombine は、本名を Cathrine Biancolelli といって、座長 Arlequin (Dominique Biancolelli) の妹娘である。⁽¹³⁾ 姉の Isabelle (Françoise Biancolelli) が1664年生まれで、1683年のデビュー当時、19才だったことを考えると、その妹は非常に若い娘だったことは、たしかである。彼女の活躍を追うことは、17世紀末フランスの社会風俗から、イタリア劇団が、どんな風に娘たちを描きだし、どんな娘役が、フランスの観客の人気をさらったかを知ると共に、今あげた疑問にも、何らかの答を見出せるものと思われる。

Colombine の登場数と、その役柄

さて、イタリア劇団が、フランス語で演じた喜劇および場面は、劇団の Arlequin 役をしていた Gherardi によって集録され、1694年に初版された。つづく6年間に、パリ、アムステルダム、ジュネーヴで、多数の再版、増版をかさね、1700年に、決定版として1681年から1697年までの作品55が、6巻にまとめられて、パリで出版された。これ以外に、脚本なしの即興の劇や場面もあ

ったわけで、イタリヤ劇団の全レパートリーを論じることにはならないが、フランス語で演じられた劇や場面が、圧倒的に多かったこと、また現代諷刺はその部分でしか行けないことから考えて、われわれはこの Gherardi 集を資料として用いることができるとおもわれる。⁽¹⁴⁾

55の喜劇を年代順に調べてみて、注目されるのは、Colombine の占める位置の変化である。表にまとめると、つぎようになる。

題 名 (初演の年)	Isabelle の登場する scènes	Marinette の登場する scènes	Angélique の登場する scènes	Colombine の登場する scènes	Colombine の役柄
Arlequin Mercure galant (1682)					
La Matrone d'Ephèse (1682)				2	小間使(幽霊)
Arlequin Lingère du Palais (1682)					
Arlequin Prothée (1683)	2			3	Bérénice
Arlequin Empereur dans la Lune (1684)	2			3	小間使
Arlequin Jason (1684)					
Arlequin Chevalier du Soleil (1685)	2			3	小間使
Isabelle Médecin (1685)	5			3	令 嬢
Colombine Avocat pour et contre (1685)	5			9	許婚の娘
Le Banqueroutier (1687)	3			9	小間使 8 未亡人 1
La Cause des Femmes (1687)	7			11	小間使
La Critique de la Cause des Femmes (1688)	3			3	男爵失人
Le Divorce (1688)	9			9	小間使
Le Marchand duppé (1688)	10			13	小間使
Colombine Femme vengée (1689)	12			16	妻
La Descente de Mazzetin aux Enfers (1689)	2			4	鯨
Le Grand Sophy (1689)	3			4	
Arlequin Homme à bonne fortune (1690)	5			6	妹 嬢

La Critique d' Arlequin Homme à bonne fortune (1690)	2			2	伯爵夫人
Les Filles errantes (1690)	3			2	苦労した娘
La Fille savante (1690)	3		4		
La Coquette (1691)	4			16	令嬢
Esope (1691)		3		10	Esope の娘
Les deux Arlequins (1691)	5	2		15	小間使
Le Phénix (1691)				6	小間使
Ulysse et Circe (1691)	7	6		16	小間使 (confidente)
Arlequin Phaeton (1692)	2	4		9	Doris
L'Opéra de Campagne (1692)				9	娘 5 女優 4
La Précaution inutile (1692)	6			9	妹 娘
L'Union des deux Opéras (1692)				3	花 嫁
La Fille de bon sens (1692)			5	23	小間使
Les Chinois (1692)	7			13	前口上 2 小間使 11
La Baguette de Vulcain (1693)	2			2	妻 1 小間使 1
Les Adieux des Officiers (1693)	2			6	Vénus
Les Mal-assortis (1693)	3			3	Gouvernante
Les Originaux ou l'Italien (1693)		1		12	令嬢
Les Aventures des Champs Elisées (1693)					Colombine の役不明
Les Souhais (1693)	4			3 以上	Colombine 役不明多
La Naissance d'Amadis (1694)	3			4	小間使
Le Bel Esprit (1694)			12	16	小間使

Arlequin Défenseur du beau sexe (1694)	9	3		9	小間使
La Fontaine de Sapience (1694)	7	1		8	小間使
Le Départ des Comédiens (1694)				3	女 優
La Fausse Coquette (1695)			8	7	妻
Le Tombeau de Maistre André (1695)		4		3	娘
Attendez-moi sous l'Orme (1695)		3		6	田舎女 5 乳母 1
La Thèse des Dames (1695)			8	15	小間使
Les Promenades de Paris (1695)	4			6	小間使
Le Retour de la Foire de Bezons(1695)			1	2	未亡人
La Foire de St Germain (1695)			3	9	多 種
Les Momies d'Egypte (1696)				4	多 種
Les Bains de la Porte St Bernard (1696)			8	10	小間使
Arlequin Misanthrope (1696)				8	前口上 1 娘 7
Pasquin et Marforio (1697)					Colombine の役不明
Les Fées (1697)		4		2	La Fée

この表を検討してみると、正確に Colombine の登場数を他の女優と比較できる41の劇の中、Colombine の方が多く登場するものは28、少いものは5にすぎない。特に1685年以後の活躍が目立ち、他の女優と10場以上の差のあることも、珍らしくない。つぎに、Colombine 役とは、どんな役だったのかを、調べてみると、Colombine の登場が確認される49の劇の中、34が娘役、花嫁も入れて8が夫人の役、5がその他となる。（その他というのは、女神など）そして34の娘役の中、実に20が小間使の役であることがわかる。^(14b)

結論として、Colombine の演技の巧みさも人気の原因にはちがいないだろうが、その役のイメージ「小間使」⁽¹⁵⁾が、喜劇の中の重要な人物として、フランス人の好みに合ったのだと言えることができるであろう。

しかし、Colombine は、また、小間使でない娘、としても14の劇に登場していることに注目し

なければならない。先にあげたように、イタリヤ劇団では、Colombine はつねに、Colombine であるという原則に従って、Colombine の令嬢は、小間使 Colombine と、非常によく似たイメージの、娘であるということが、当然、想像できる。このことを、ほんらいの令嬢役、Isabelle や Angélique と比較しながら、あきらかにし、同時に Colombine のイメージを浮出させたい。

他の娘役との性格の比較

まず、Isabelle と、Colombine のちがいを、ひとことで明らかにする科目を、Colombine 自身が言っているので、それを引用したい。1694年の作品、*Arlequin, défenseur du beau sexe* の中で、「人間みんな、それぞれ欠点はあるもの」といった後で、「Colombine est trop gaye, Isabelle est trop sérieuse.」(Acte II scène 2) と彼女は云い、それを裏書きして、Isabelle は、「Tu badine toujours, Colombine: peux-tu rire dans une affaire si sérieuse?。」と、恋愛においても、笑うこと第一の Colombine におどろいている。Isabelle が、真面目な恋人役で、Colombine が、茶化し役というこの役割は、Colombine が活躍しはじめる以前の、1683年の *Parodie de Bérénice* (*Arlequin Prothée* の一場面) でも、すでに、はっきりしていて、そこで Colombine は、Bérénice を演じながらも、恋にやつれた、ため息が、自分には似合わないと宣言し、「je ne veux d'un amant que pour rire」とか、「je hai le sérieux, j'aime l'enjouement.」とかいって、Isabelle をおこらせる。Isabelle は、「vous raillez assez bien. Vous jouez votre rôle, j'ai joué le mien.」と去ってゆく。(A. I, S. 2)

Isabelle の純真型と、Colombine の享楽型の対照は、イタリヤ劇団の中で、一つのパターンのように、くり返され、だんだん大きな興味の中心になって行ったようにおもわれる。すでに1684年の、*L'Empereur dans la lune* のように、Colombine のあまり目立たない作品にも、*Scène d'Isabelle et de Colombine* があり、そこで、気にそまぬ結婚を心配している Isabelle に向って Colombine は、「Que vous êtes bonne!」と笑い、結婚は生活のためにするもので、後はたのしくくればよいと、割切っている。(t. 1, p. 143)

恋愛をテーマに、二人の娘の意見が、わかる場合には、Isabelle は誠実さを重視し、Colombine は策略を第一とこころえる。1691年の *La Coquette* で、二人の娘は議論して、おけいこごとにはげんでも、仲々恋人ができないとなげく Isabelle に、Colombine は、「l'homme est un animal qui veut être trompé.」と観察し、「il faut bon gré mal gré que quelque bête donne dans les toiles」(A.I, S. 2) といっ、相手を感じさせている。

この対照は、Isabelle の後をついだ Angélique⁽¹⁰⁾ の場合も同じである。*La Thèse des dames* (1695年初演) で、恋人への忠実をちかう Angélique は、これを笑う Colombine におどろいて、「Tu es donc persuadée que la fidélité est un meuble inutile à une fille?」と問い返す。Colombine は、「Oui, et c'est une thèse que je prétens soutenir」とまで云って、それが劇のテーマとして展開する。(A. II, S. 3)

さらにこの対照は、結婚にさいしての、二人の娘の選択の基準のちがいに、強くあらわれ、そこから、女性としての人生をどう歩むかという、ちがいに深く発展してゆく。Isabelle や、Angélique は、結婚に際して、自分の愛、自分の心を第一に考える理想型、Colombine は、その夢のような生き方を笑って、結婚は生活の手段でしかないと割切る、徹底した現実型である。

「que mon amant soit mon mari; mon mari soit mon amant」と希う Angélique にむかって、Colombine は、「Tout vieux médecin qu'il est, il est riche」と全く別な見地を示し (*La Fille de bon sens*, 1692年, A, I, S, 3), *Arlequin, défenseur du beau sexe* (1694年) でも、結婚前に、ありのままの自分を見てもらいたいと理想をのべる Isabelle に、Colombine は、「相手の女のありのままがわかっても、なお結婚するほど向うみずな人間が、いるものですか」と一笑に附している。(A. I, S. 5)

この基本的な性格は、Colombine が、たまに Isabelle のような令嬢役をやった時にも、現わされていて、*La Coquette* では、気にそまぬ結婚をすすめる父を怒らせた末、「いくらでもどなるがよい。父親が不機嫌だからといって、恋人を失ってたまるものか。この恋人の少い時期に。」と、いっこうやさしさのないところを見せている。また1691年の *Esopé* でも、「お父さんの御約束です。」と、結婚をせまる相手に、Colombine の令嬢は、「では、父と結婚されたいかが？私の約束と関係ありません。」(A. II, S. 1) とやり返す。とに角、なよなよとした女らしさは、令嬢 Colombine にも、決してみられず、Isabelle のような単なる恋人役は、55の劇を通じて、*Précaution inutile* (1692年) の妹役だけで、たとえ令嬢であっても、ずい分がめつい娘を演じている。*Les originaux* (1693年) では、Colombine は騎士にむかって、「Vous savez, monsieur, qu'en tout pays, l'argent sert d'introduction au mérite.」と宣言しているし、*La Femme vengée* (1689年) では、Colombine のやり方に、乳母がおどろいて、「この娘は、3ヶ月で歯が生えていた。だから（鶴亀々々！）18才のわりに大変なやり手になってしまった。」(A. I, S. 1) と感心する。⁽¹⁷⁾

以上、Isabelle や、Angélique が、真面目で、誠実な、夢みがちな恋人役であったのに対して、Colombine が、理想を追わず、策略を好み、現実の人生を面白おかしく生きようという享楽型を演じていたことが、はっきりしたと思われる。Colombine が、フランス人観客の好みに合って、どんどん Isabelle を圧倒して、場面をうばっていったことを考える場合にも、この基本的な役柄の性格を抜きにすることはできない。

けれども、17世紀末の喜劇界の流行が、風俗喜劇へ向い、現代社会の諷刺が、その主流を占めつつあったことを、思いあわせると、Colombine には、もっと別な要素が——当時のフランスの社会の期待に応じるような大きな要素が——備っていたことが考えられる。以下は、Colombine をさらに詳しく分析して、こうした要素の解明にあたりたい。

Colombine の身分

先の表でもみたとおり、Colombine の演じた34の娘役の中、実に20が、小間使の役であった。そこで、当時の小間使の身分に少しふれて、それが、いま検討した Colombine のイメージと重って、どんな小間使として、観客に好まれたかを、明らかにしたい。17世紀も末になると、経済的支配権を手に入れて、「貴族らしく」生活することに専念していた Bourgeois 階級の妻や娘達は、Molière に出てくるような、家事万端をとりしきる年輩の servante⁽¹⁸⁾の他に、身のまわりの世話をする小娘を手許において、お供にもつれて歩くのが普通になった。小間使を志願する娘達は、小官吏の娘などが多く、⁽¹⁹⁾ 或程度の教養もあり、気が利いていて、女主人の気持をのみこんでいて、恋文のお使いもするし、髪を結ったり、化粧をしたりするのも、小間使の役であった。いま資料として用いているイタリア劇団のレパートリーの中にも、小間使が、自分の化粧の腕に自信をもっているさまが、描かれている。Colombine——「Que ne me laissez-vous faire? Je ne veux qu'une petite couche de rouge pour réparer des trente méchantes nuits, la plus obstinée. (*le Divorce*, A. I, S. 6)

また、若い女主人と、同年輩の若い娘で、一種の遊び相手にもなっていたらしい。小間使は、女主人の客と、ménuet を踊ったり (*le Marchand duppé*, A. II, S. 9)、女主人のダンスの先生と踊ったりもしている。(*le Divorce*, A. I, S. 6)

このような、主従二人の若い娘の場面は、55の作品の中でも大変多いので、まず、Colombine の小間使は、女主人と、どんな関係にあるのかを検討してみよう。

先にみたように、Isabelle や、Angélique と、Colombine の人生観は、全く対照的なものだから、主従の場は、いつも意見の対立によって活気づけられている。そしてその場合に、つねに、小間使 Colombine の意見が、相手をひきずって、おわるのが目立つ。

17才の女主人が、同年輩の小間使にそそのかされて、「Fais donc tout ce que tu voudras.」と人の噂を気にしながらも、夫と別れる算段を委せる話 *le Divorce* もある。Colombine は、「laissez-moi faire.」(A. III, S. 1) とか、「Ne vous mettez pas en peine, Madame, je vous en tirerai.」(ibid, S. 3) と自信たっぷり、まんまと成功するという筋である。*Le Marchand duppé* でも、令嬢 Isabelle は、「je ne parle en compagnie que sur la tablature que tu me donnes.」と、Colombine のかいらいで、「J'ai usé toutes mes ruses pour vous faire subsister.」と云う科目のとおり、二人の貧しい主従の娘は、Colombine の才覚で生活してきたのである。(A. I, S. 5)。*La Fille de bon sens* でも「Laissez-vous conduire.」と女主人を牛耳り、(A. I, S. 3) *Les Chinois* では、令嬢に、選ぶべき夫について「dis-moi en conscience.」と、たよりにされている。Colombine はいつも、「Croyez-moi, je ne vous donnerai jamais de méchants conseils.」(*La Thèse des Dames*, A. I, S. 5) と、たより甲斐のある娘である。

こうして、女主人との関係においては、Gherardi の集録した劇全体を通じて、主導権が Co-

lombine にある。それはまた、彼女が、いつも実行力に富む女性として描かれているということであり、劇においては、常に、進行をきめる重要な役割を果たすという結果になる。

Colombine と悪だくみ精神

ではつづいて、Colombine の生き方の検討に入ろう。

第一に目につくのは、彼女が、この時代の喜劇の小間使の例にもれず、金銭万能の、徹底して immorale な思想の持主である場合が多いことである。ある時は、令嬢にとりなしてあげると巧みに女主人の伯父から金をせびり (*Le Marchand duppé*, A. II, S. 2), 富裕な商人からは、令嬢をそそのかして、金をまきあげる (ibid, A. II, S. 8)。またある時は、財力が第一だと、財務官との結婚をすすめたり (*Arlequin, Empereur dans la lune, scène d'Isabelle et de Colombine*), 「De quel que part que viennent l'argent, il sens toujours bon.」 (*la Fille de bon sens*, A. I, S. 2) とうそぶいて、令嬢に、金持との結婚をすすめている。小間使の余得を語り、いかに金をまきあげるかを、おもしろおかしく話してきかせる場面も多い。(例えば、*Les Souhais, scène de Colombine et d' Isabelle* や、*Le Départ des comédiens*. A. I, S. 6)

こうして、シニクな人生観をまきちらし、女主人をそそのかして、とりまき連から金をまきあげるところに、Colombine の小間使役の本領があるのだが、しかし、他の劇に端役で出てくる小間使とちがって、Colombine の役割は、そこでおわらないのである。

彼女は、令嬢の、夢みたいな結婚への理想や、若妻の、色男への甘い恋などを、わらって、からかいながらも、女主人の気持に味方して、結局は、その恋をとげさせてやるのである。そしてここに Colombine の、面目と力とが発揮される。

この構造を、典型的な劇をパターンにして説明してみよう。

Le Marchand duppé は、1688年の作品。美しい令嬢 Isabelle は、お金に困っているが、恋人 Aurelio と結ばれるためには、誠実さが第一とおもってきた。⁽²⁰⁾ 小間使 Colombine は、恋人には嫉妬心をおこさせなければ駄目と伝授、Isabelle は Colombine に援助をたのむ。(A. I, S. 5) Colombine の策略で、富裕な商人、Friquet は、妻の目をぬすんで Isabelle に大金を運び、その息子は、めかしこんで父にかくれて令嬢のところに入りびたり (S. 5), 老人の医者も、Isabelle に想をかけて、Colombine に金をまきあげられる (A. II, S. 2)。結局、商人と息子がばったり出会って、思わせぶりでみんなを操っていた Colombine と令嬢の手口が、ばれそうになるが (A. III, S. 6), Colombine が、すばやく商人の妻をよびにやった、またはそのふりをしたので (S. 7), 商人はあわてて逃げ帰り、今はまったく Isabelle を熱愛するようになった Aurélio と令嬢は結ばれ、Colombine は、その下僕と結婚する (S. 8)。

この劇は、もっとも単純に典型的な situation を示しているが、イタリア劇団で、Colombine に、してやれらる型は、大体三つに大別できる。御金の力で、若い令嬢と結婚しようとする老人

(職業は医者が多い)、女たちの手管にかかっておだてられ、金をしばりとられる財務官や大商人、若い妻が、夜遊びや賭や恋愛三昧にふけるのが、我慢できない嫉妬深い夫、である。若者たちの自然な恋の味方をして成就させるという筋は、Molière にも多く、喜劇の常道であるが、世紀末の世相を反映して、目を射るのは、夫をだまし、金持のかもをだまして、伊達男 (joli homme)⁽²¹⁾を相手に、賭や、ぜいたく三昧にふける、女たちの手練手管のおもしろさ、である。⁽²²⁾ いう場合、劇はかならず、筆略の勝利におわり、女たちがひどい目にあうことは、一度もなく、古い道徳を足蹴にしたような、一種独特の論理で、貫かれている。若くて、美しい女を、閉ちこめておこうなんて、もっての他だ、私たちは快樂をもとめ、自由に生きる権利がある。欺されるのは、自惚れのつよい男たちがわるいのだといった、基本的な主張の上にたって、劇が展開しているのである。

しかし、極端に享樂的な一面を反映しながらも、ここでは、策略は、女たちが、男性の身勝手に対抗して、弱いものが強いものを、へこまそうとする時の、唯一の方法として是認されており、劇の中に、何度も、その弁明が、あらわれている。例えば、女性にだけ、貞淑を強いる身勝手さを、Colombine は指摘し、こんな道徳は、年よりの都合のために発明された、「de vaines chimères.」(*La Thèse des Dames*, A. III, S. 4) だと、弁じて、相手を降参させている。浮気な夫を妻と情婦が協力して、たたきのめす話、*Colombine, femme vengée* では、「Si on faisait tous les mois trois ou quatre lescives de cette force-là, les hommes se tiendroient un peu plus dans le respect.」(A. II, S. 12) と、下僕が秘かに感想をもらしている。

力や金のある、この社会の支配者を、たくみな、わなにかけて、やっつけろという発想は、*la Fourberie de Scapin* といった傑作をも含めて、喜劇の本質の一つのように思われる。この点、Colombine の存在は、他の多くの喜劇の下僕役と、対をなすもので、ずるくて、りこうな下僕に対する人気の高まりと、関係づけることができる。その一つの証明として、小間使 Colombine と、下僕 Arlequin のかけあいの場面が、全集録を通じて、圧倒的に多いことがあげられる。⁽²³⁾

先に、一つの典型としてあげた、*Le Marchand duppé* でもそうだが、1692年の、*La Fille de bon sens* でも、Colombine は、令嬢の恋人 G ron te の下僕、Arlequin を、見込みのある人間と認め、将来を語り合う。そして、二人の主人たちを、結び合わせ、自分たちも結婚しようと、協力を約束する (A. I, S. 5)。Arlequin が、じゃま者の一人、老医者をも、撃退しているあいだに、Colombine は、他の恋仇、Octave と Cinthio をわなにかける。人生の裏を知りつくした者同志の、意気のあった策略家ぶりは、当時の観客を、充分たのしませたにちがいない。恋もまた、彼らにとっては、主人たちのような思わせぶりではなく、この仲間意識の延長のようで、うてばひびく短いやりとりは、⁽²⁴⁾ 1 世紀後の傑作、Figaro と Suzanne を、おもわせる。

令嬢や若い夫人が、やくざ貴族の、かっこよさに魅かれるのちがって、Colombine が、下僕の中に評価するのは、つねにその才気である。「je connais assez les gens de condition pour les estimer selon leur prix.」(Arlequin, défenseur du beau sexe, A. III, S. 2) と、いいきる彼女は、「Que tu es devenu habile depuis que je ne t'ai vu.」(*La Fille de bon sens*, A. I, S. 5) と、Arlequin を評価している。⁽²⁵⁾

地位も生れも金もない彼らにとって、将来をきずくものは、ただ自分の才覚だけでしかない。この意味で、Colombine が、古い道徳も、倫理もけとばして、なお価値を認めるものがあるとするれば、それは、esprit だけだといってよいであろう。「財産も家柄も、何するものぞ、esprit があれば、すべてこの世は何とかなるさ。」後に Figaro に体现される、この楽天的人生観が、実現しうような流れにむかって、社会が動いていたのだろうか？それは後の研究にゆずることにして、すくなくとも喜劇の世界は、esprit 万能の世界であり、そこで実現する策略の勝利に、観客は拍手をおくったのである。こういう見方に立つと、Colombine は、まさしく観客の寵児になる要素をそなえた娘である。「Ma foi, il n'est que d'avoir de l'esprit, tôt ou tard, on se tire d'affaire.」(*Le Marchand duppé*, A. III, S. dernière の成功を喜ぶ Colombine の科白)と陽気な人生観にあふれたこの娘が、たよりにするものは、だから自分自身の才覚だけである。⁽²⁶⁾

「Je ne passe pas pour bête.」(*Le chevalier du soleil, scène sur les garçons marchands*) と自負し、「Allons, Colombine, c'est ici qu'il faut employer ton savoir-faire.」(*Les Bains du port de St Bernard*, A. I, S. 2) と、自分を励ましている。Colombine のイメージの最高のもものは、この活き活きした、悪だくみ精神である。若く利発な、娘役の、この悪だくみ精神には、何ともいえぬ軽やかな自由の魅力があったにちがいない。

Colombine と社会諷刺

ところで一方、才気を縦横に働かせ、支配者を思うつぼにはめるには、人間をよく知っていないければならない。Colombine がしばしば、「Croyez-moi, je me connois un peu en gens.」(*Le Banqueroutier, scène de Persillet et de Colombine*) とか、「vous ne vous connaissez pas en homme.」(*Les Chinois*, A. I, S. 4) とか言うのは、この設定をよく示している。

悪だくみ精神の活躍という面白さと同時に、この現実の人間、社会の Connaisseur という設定は、Colombine に、現代社会の語り手という、大きな、新しい役まわりを与えることになった。その科白は、喜劇が、Comédie des mœurs の流行を迎えていた時代には、観客のたのしみの、大きな部分を占めつつあったと考えられる。Comédie en français や scènes françaises の場合に、現代を語る場面が、必ず一つは、長々と存在しているのがその証拠であるが、その語り手は、殆んどの場合、Arlequin と Colombine なのである。以下は、Colombine の場合をとりあげ、彼女がどんな風に現代風俗を語っているかを分析してみよう。

先ず第一に、Molière が多く描いたような、現代社会の矛盾の批判者としての場合。例えば、

結婚に際して、娘の選択を認めず、幽閉しようとする愚かさを「de toutes les précautions, celle de garder une femme est la plus inutile.」(*La Précaution inutile*, A. III, S. 3) と批判し、妻を家事に専念させようとする夫に、「Sommes-nous faites pour vivre prisonnières dans la maison.」(*Colombine Femme vengée*, A. I, S. 1) と抗議している。その他、娘の反抗は、父の無理解が原因だというもの、「S'il n'avoit songé qu'à son ménage, il n'auroit pas eu tous ces chagrins-là.」(*Les Bains de la porte de St Bernard*, A. I, S. 1), 女性も自分の運命は、自分で切り開くべきだというもの、「La plupart des femmes ne sont malheureuses que faute de résolution.」(*Colombine Femme vengée*, A. II, S. 9) などである。これらの批判は、多く既成の社会の束縛に対抗して、女性の立場を擁護しようというもので、それは、女性をとりまく社会の重圧が、決して軽くなっていなかったことを示すが、Colombine が、はっきり批判者の立場をとっている時には、その主題が、いずれも、Molière 以来の *lieu commun* であることを、まずあげておきたい。

第二は、肯定も否定もせず、時代の流行を語っている場合で、量からいって、比較にならないほどの大きさを占めている。Adam は、1680年以後の世相の大変化を、文学史の中でのべているが、⁽²⁷⁾ *La Cause des Femmes* でも、そのことが、のべられている。「Où est le temps que le beau sexe voyoit assiduellement à ses pieds une jeunesse florissante? ...les choses ont bien changé de face.」(*scène du plaidoyé d'Isabelle*)

戦争に荒廃した道徳、青年たちは、その場かぎりの享楽にふけり、賭や、お洒落の資金を、金持ちの未亡人からまきあげようとする。いわゆる *Joli homme* の流行である。この世相を反映して、Colombine は、色男がどんな風に、女から金をとるかを詳しく描写して、「les vieilles ne sont pas les seules qui donnent, les jeunes en ont pris aussi la méthode.」(*Ulysse et Circe*, A. I, S. 3) と説明する。長くつづいた戦争は、喜劇にもはっきり影をおとしていて、「l'année n'est pas bonne pour les filles, tous les garçons sont à la guerre.」(*Les Filles errantes, scène de M. Croquignolet*) と、旅籠の娘はなげいている。恋愛三昧の主都では、一番人気のある *gens d'épée* が、夏の間は出陣するので、恋人の不足をきたすことになる。*Le Phénix* の初の場合で、Colombine は、officiers の出発を語り、「nos ruelles menacés d'un déluge d'abbés, de chicaneaux, et de tant d'autres insectes de la galanterie.」と話している。また、「mais, ce sont des oiseaux semestres qui disparaissent avec les hyrondelles.」と、軍人たちが、冬の間、人気をさらう様子を、よく描いている (*La Coquette*, A. I, S. 7)。

こうして、賭や恋人に貢ぐために、金庫の鍵をにぎることが、Bourgeoise の理想とされ、⁽²⁸⁾ 妻は夜中に遊びにでかけて、5、6日も夫婦が顔をあわさないという設定⁽²⁹⁾も、数多くみられる。夫から金がでないなら、恋人からしほろうという、*Coquette* も多くいて、*Joli homme* に対抗して、喜劇の面白いテーマだったらしい。*La Coquette* の中で、Colombine は、恋人の、それぞれの利点を、簡単明瞭にのべている。「je ménage tout le monde pour des raisons particulières:

…je me distingue en voyant les gens de cour, les officiers me font plaisir, je trouve des ressources parmi les financiers.」(A. I, S. 6) また、*Le Phénix* では Coquette をべんごして、「Et après tout, n'est-il pas juste que nous ayons notre revanche?。」と男女ともに、乱れた風紀の世を現わしている。これらの現代風俗の描写は、そのまま、面白おかしく語られることによって、一種の社会諷刺として、人気を博したものとおもわれる。

第三は、制度として、のしかかっていた社会的重圧を、巧みにすりぬけて、これらの風潮にのって、羽をのばす女たちの、新しい流行に関するもので、この場合には、Colombine は、そうした流行に賛同を示し、積極的にそれを利用しようとしている。賭や浮気にふける Coquette な女主人の小間使を演じる場合には、Colombine は、必ず女主人の味方であって、劇の構造からみた、役柄の重要さから比べれば、第一と第二の場合を、はるかにしのいでいる。例えば、*La Cause des Femmes* の小間使 Colombine は、賭を禁じられて嘆いている令嬢に、「Mariez-vous.」とすすめる。そして夫を手なづけ、たちまち金庫を自由にし、夜もおそくしか帰らず、少しずつ自由を獲得する方法をすすめている (A. I, S. 2)。また Coquetterie の必要をいって、「avec un peu de beauté…, une fille ne va pas loin dans le siècle où nous sommes, il faut de cela pour plaire.」(*La Coquette* A. I, S. 2) と、頭を指さして、Coquette の理論を展開、頭のよさを強調している。また女主人が、吝嗇坊の父に、着物もかってももらえない、大人しい令嬢である場合にも、小間使 Colombine は、策略をあみ出し、商店の店員に色目をつかって、主従の若い娘二人が、ただで着物を手に入れる方法を思いつく、といった、ゆかいな劇もある。この主題が、全く当時の新しい社会現象から、得られたことは確である。「Ces messieurs sont des marquis de boutique, … Enfin ces messieurs sont les beaux garçons marchands de la rue aux Fers, de la rue St Honoré.」(*Arlequin Chevalier de Soleil, scène sur les garçons marchands*).

Colombine 役発展の原因についての考察

以上、Colombine 役が、フランス人観客の好みに応じて、どんどん重要性をまして行ったこと、Colombine 役とは、どんなイメージの役で、どんな考えの持主で、どんな役割を果たしたかということが、明らかになったと思う。これらの事実にもとづいて、最後に、何故 Colombine が、それほど大きな人気を博したかという問題を、少し考えてみたい。

先に、Adam の文学史を引用したが、Lintilhac もその「演劇総史」の中で、17世紀末の、風俗喜劇の流行を指摘し、Molière の遺産のこの部分の発展を、*La Comète* (Donneau de Visé) — *Le Mercure galant* (Boursault) — *L'Homme à bonne fortune* (Baron) — *Le Chevalier à la mode* (Dancourt) とたどって、系譜を確立している。⁽³⁰⁾ イタリア劇団の人たちが、ここに力を入れたことは当然で、Adam の説と共に、われわれの見たところも、それを証明している。

ところで、現代風俗を語る場合、いろいろの苦勞をなめてきた小娘が、小間使という、客間の裏を見る立場で、りこうな、いきいきした観察を語るという設定は、劇の構成上、非常に便利だ

った、ということが、第一に考えられる。イタリア劇団の現代風俗の科白描写の場面が、ほとんど Arlequin と Colombine によって演じられているのも、そのためである。Colombine は、Comédie des mœurs という波にのって、その小間使という役柄によって、人気を博したと、まず、いえるだろう。

つぎに、どんな見方で、現代社会を眺めるのが、面白いかといえば、世の退廃をなげくより、社会の偽善の裏をみて、大笑いするのが喜劇の本質だということを考えると、既成の秩序の重圧をくぐりぬけ、尊大ぶった権力者の自惚れと思かさを利用して、自分の思った方へ動かしてゆくのが一番面白いにちがいない。活潑に策をたて、だましたり、すかしたりして、機敏に一杯くわせる、この小間使に、人気の集ったのをみると、17世紀末の、偽善的な社会の中で、人々は、束縛の中に生きる女性に味方して、その術策に拍手するほど、軽やかな自由に憧れていたのだと、理解できる。世相に敏感な、イタリア劇団を通じて、喜劇の世界は、すでに、18世紀初頭を予告していたのである。⁽³¹⁾

さらに、あらゆる特権に、がんじがらめになった絶対王制の下で、自分の頭だけがたよりの小間使に、喝采をおくる観客は、その秘められたエネルギーを信じ、才覚を信じはじめていたのにちがいない。若いながら、がっちりやで、金銭欲にも無縁でなく、悪をみても面白がり、自分の頭のはたらきを信じて、主人たちをひきまわす、陽気な Colombine は、やがて、Marivaux 劇で、磨きをかけられた後、小意気にエレガントな Suzanne にまで成長するが、この娘に魅力を感じたフランスの観客の中には、身分も家柄も、何ものでもない、個人の頭のよさだけで勝負しろ、という全く別な価値体系への淡い希望が、18世紀を先取りして、生まれていたにちがいない。以上、Colombine 役の発展と、その社会的背景との間に、一つの関係を推定してみた。この検討は、今後の研究にゆずりたいが、最後に、われわれが、附属的に、仮定していた、Marivaux 劇や、Dancourt 劇との、関係はどうだろうか。Colombine のような娘が、実際の社会に、多くなっていたかどうかということろまでは、結論できないけれども、イタリア劇団でも、Dancourt 劇と同じく、娘役は、充分行動力を与えられて、活躍しており、その行動手段は、つねに策略だったとすることができる。ただ、同じ若い娘でも、Dancourt 劇よりも、小間使の活躍が目立ち、小間使 Colombine と、下僕 Arlequin の恋が、主人同志の恋と、二重奏をかなでる設定が多く、この点、Dancourt 劇よりも、Marivaux 劇をおもわせる。Marivaux 劇の著しい特徴である、小意気な、かしい小間使が、イタリア劇団のレパートリーに、見られることは、この劇団が、18世紀初頭に、再度来仏したこととも合わせて、Marivaux が、ここから大きな影響を受けていたことを、示すといっていよいであろう。⁽³²⁾

Colombine の性格という面から考えると、Dancourt の娘役が、令嬢も、小間使も、野心にもえて、劇中にはまりこみ、一つの諷刺の対象になっていたのに対して、Colombine は、しばしば、舞台にのぼせられた現代風俗を、描写、註釈する役割を、はたしており、Molière の田舎ものの召使のような批判者とまでは、いえないけれども、観察者としての、りこうさ、を感じさせ、

一種の貫録を与えられている。イタリヤ劇団のために、いろいろの作家が、脚本をかいたにもかかわらず、小間使 Colombine は、全作品を通じて、一度も失敗して笑われる目にあっていないことも、この印象をつよくする。もう一言、つけ加えるならば、Marivaux 劇の小間使が、善意にあふれていて、道徳的なものに対して、同じように小意気で、きびきびしながらも、Colombine の人生観が、既成の道徳をものともせず、鋭くシニクであるのは、やはり Dancourt の時代をあらわしているといえよう。

註

- (1) 《A partir de 1680, ... la troupe d'acteurs italiens installée à Paris depuis 1660, a son propre théâtre》, (W. J. Kirkness, *Le français du Théâtre Italien*, p. 15).
- (2) Anne Mauduit de Fatouville の協力 (1681—1692), J. Delosme de Monchesnay (1688 début) J. F. Regnard (1688—1694), Dufresny (1692—) の4人で Recueil に集録されている劇の70%。他に, J. Palaprat, E. Lenoble, L. Biancolelli, Gherardi, Mongin, Boisfran, DLM. LADSM. LCDV. LAP. など。
- (3) 《L'impulsion décisive fut donnée par la Comédie italienne》, (A. Adam, *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, t. V, p. 280).
- (4) Lintilhac, *Histoire générale du théâtre*, III *La Comédie au XVII^e siècle*, p. 379
- (5) A. Adam, *op. cit.*, t. V, p. 283—287.
- (6) A. Calame, *Regnard, sa vie et son oeuvre*, p. 147.
- (7) *Ibid.* p. 145, 146 及び notes.
- (8) *Ibid.* p. 148.
- (9) *Gallia*, X—XI号.
- (10) Lintilhac, *op. cit.*, p. 393; W. J. Kirkness, *op. cit.*, p. 18.
- (11) 例えば, Dancourt (*L'Été des coquettes*, joullet, 1690): Théâtre italien (*La Coquette*, janvier, 1690). Dancourt (*Attendez-moi sous l'orme*, mai 1694): T. italien (同名 janvier, 1695). T. italien (*La Baguette du Vulcain*, janvier, 1693): Dancourt (*La Baguette*, avril, 1693). T. italien (*La Foire de S^t Germain*, décembre 1695): Dancourt (同名, janvier, 1696).
- (12) 赤木富美子「Fontenelle の劇作品における娘たち」(*études françaises* 第10号).
- (13) Calame, *op. cit.* p. 146.
- (14) *Le Théâtre italien de Gherardi ou le Recueil général de toutes les Comédies et scènes françaises jouées par les Comédiens Italiens du Roi, pendant tout le temps qu'ils ont été au service*, Paris, 1741 を使用, 以下 A=Acte, S=Scène と略して引用する。
 (14b) Calame は, Colombine 活躍の証明として, 次のように言っている。「Cette même critique (*la Critique de l'Homme à bonne fortune*) montre à quel point le public ressentait l'importance de Colombine. La baronne disant《qu'il faut que Colombine crève sous ce rôle-là》, le marquis la rassure en affirmant que《jamais femme n'est morte de trop parler》(p. 171). ただ同時に, Colombine が, Isabelle を圧倒する人気を得た結果, 或作品では, 「enfin, Colombine, ... relègue Isabelle dans les fonctions de servante」(p. 169) と言っているのは, 誤解をまねく言い方であると思う。表にあらわれたところでは Colombine がもっとも活躍するのは, この後も小間使としてであり, 小間使役が必ずしも重要でないとはいえない。このことは, 以下に証明してゆく。なお Marinette と Angélique は, 同一人物だが, (Angélique Toscano) 初め, Marinette と名のって主として女中役で

あったので、別々に記した。

- (15) M. R. Demers の研究に用いられているように、soubrette という呼名が、一番普通だったようである。
Demers, *Le Valet et la Soubrette de Molière à la Révolution*.
- (16) 本名 Angélique Toscano. Capitan 役の, Pascariel の妻, 初め Marinette 役。
- (17) «Cet enfant-là avoit des dents à trois mois. Aussi (dieu la bénisse) la voila bien avancée pour son âge: il y a mille femme à Paris, qui n'en savent pas tant à leur troisième mari, que celle-là à son premier», (A. I, S. 1).
- (18) «la soubrette ne ressemblait pas à la vieille servante des comédies de Molière», (A. Adam, *op. cit.*, p. 285).
- (19) L. Abensour, *La Femme et le Féminisme avant la Révolution* に詳しい研究がある (p. 222—4).
- (20) «je pensois, moi, qu'une humeur sincère, soutenue de beaucoup de probité, engageoit plus fortement».
- (21) 詳しい説明は, Kirkness, *le français du Théâtre italien* 参照。
- (22) 例えば, *L'Empereur dans la Lune* (S. sur les garçons marchands), *Le Divorce*, *Le Marchand duppé*, *La Coquette ou l'Académie des Dames*, *La Fille de bon sens*, *Les Adieux des Officiers*, *Les Aventures des Champs Elisées*, *Les Souhais*, *Le Départ des comédiens* (S. d'Arlequin et de Colombine), *Les Promenades de Paris*, *Les Momies d'Egypte*, etc.
- (23) 劇の中だけでなく、後には, *Le Départ des Comédiens* や *Arlequin Misanthrope* のように、前口上の場は, Arlequin と Colombine でやるようになっている。
- (24) A. 「Oh ça, ma chère Colombine, tu sais que je t'aime autant...Voyant Colombine qui considère la bourse, autant que tu aimes cette bourse. Nos maîtres vont se marier, il faut nous marier aussi.」 C. 「Nous verrons.」 A. 「Comment nous verrons?。」 C. 「J'y penserai.」 (*La Fille de bon sens*, A. I, S. 5).
- (25) A. 「J'ai de l'esprit comme un diable.」 (*ibid.* A. I, S. 5).
- (26) 「Quand une fille a quelque savoir-faire, elle ne manque pas d'adorateur」(*Momies d'Egypte*, A. I, S. 1). 「une fille un peu savante sur l'article (mariage) le (homme) manie comme un chamois」(*La Coquette*, A. II, S. 3).
- (27) A. Adam, *op. cit.*, t. V, chap. 1^{er}, Le Climat.
- (28) 「Un mari ne doit que...faire venir l'argent à la maison, et la femme...le dépenser」(*La Fausse coquette*, A. II, S. 3)
- (29) *Le Banqueroutier*, A. I, S. 1 など典型的。
- (30) L'intilhac, *Histoire générale du théâtre*, tome III, *la Comédie du 17^e siècle*, p. 434.
- (31) こういう傾向に対して、反対の動きも強く、A. Adam, *op. cit.*, t. V, p. 287—9 など参照。
- (32) G. Larroumet, *Marivaux sa vie et ses oeuvres*, p. 36.